

## 「閨」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

春の霜夜の街灯に執着す 長井 敦子

春霜の降りた住宅地か。畑がいくらか残るほどの町にいよいよ夜の帳が降り、街灯が大地へ強い光を放ち始める。春の霜が目で確認できるほどの光だ。街灯の色温度はまちまちで、昔ながらの街灯の裸電球はたいいてい暖かな色をしている。その光が作者の心を捉え離さなかったのだろう。執着とは立ち尽くすこと。

満ち潮や磯巾着の花笑ふ 中嶋きよし

この句の「磯巾着の花」は、満潮時に見える群生した磯巾着の素晴らしい景観。例えば真鶴半島の天然記念物であるウメボシイソギンチャクは満潮時に濃紅色の美しい花を咲かせるそうである。それを「花笑ふ」と感受した作者の心の豊かさ、ゆとり。

夕べまだ日の明るさに鯖焼く 中村 敬子

鯖は、晩春の頃に産卵のため沿岸に来るのでその名がある。刺身、焼魚ともに美味で、高浜虚子にも「一匹の鯖を以てもてなさん」の句があるくらいだ。掲出の句で

は、春ならではの微妙な時間の移り変りを「夕べまだ日の明るさに」と的確に表現。鯖の美味しさが伝わってくるようだ。鯖は近年、温暖化により北上している。

吾が庭発はこべらのペペロンチーノ 中村 東子

春の七草の一つであるはこべをペペロンチーノに使ったというだけの句だが、上五の「吾が庭発」に工夫がある。家の庭に生えていただけのものを「吾が庭発」と元氣よく表現し、ペペロンチーノの美味しさを演出している。〈子規庵発夜汽車の座席みな鶏頭 明俊〉

青き踏みあの日の歌は早春賦 中村 幹子

踏青の途中で、かつて楽しんだ仲間達との野遊びを思い出したか。あの日歩きながら歌った歌が「早春賦」。今年の春は気候変動の影響で寒の戻りも度々あった。暖かな野に出での「青き踏み」は、精神的にも貴重な一日であったに違いない。

子のあらば負うて桜を見せましを 野沢 慶子

身近にお子さん、お孫さんが現在いないのだろうか、「子のあらば」と詠む。そして、その子を背負い今見ごろの美しい桜を見せてあげたいのにと。「見せましを」に嘆き、悔しさがあり身につまされる。満開の桜もよく見える。

連翹や許しの光満ちて来る 野村 雅美

連翹の垣根から返ってくる光はとても眩しく、目が開けられないこともある。その光をこの句は「許しの光」と詠んでいる。作者の心の底にある積年のわだかまり、罪の意識がその光に照らされるのだが、連翹の放つ光は慈光ともいふべきもの。作者はその光にやさしく包まれ「許し」を得た。「光満ちて来る」には安らぎも。

梅ほつほつ鶯顔し鳥集ふ 橋本 恭子

梅に鶯はまことに目出度い景。だが私の回りには生憎梅と鶯がセットで存在したことがない。見ているのは、この句の通り、鶯とは別の鳥、例えば目白など。その鶯ではない鳥が鶯に成りきっていると詠んだ視点が、なかなか個性的で秀抜。勿論、鶯顔の鳥に罪はない。

鎌倉のテラスのランチ風光る 長谷川菊男

麗らかな春の日の、軟らかい風にゆらぐ風景。その眩いような明るさを感じ取ったのが「風光る」。この句では鎌倉の或る洒落たレストランのテラスから、そのような明るさを作者は感受している。鎌倉のテラスのランチといわれると、私は浅草育ちなので××××と反撃したくなるが、鎌倉殿には勝てそうもない。否、かなり前に店を閉じた「ジロー」のハンバーガーなら勝てるかも。

孤独好き群れるのも好き木の芽伸び 長谷部幸子

「孤独好き群れるのも好き」はいろいろの木の芽をよく観ての実感であり、作者自身もまたこの相矛盾した傾向を持つていると思われる。自由気儘に伸びるその喜びが感じられる句である。

かげるふや後る姿の足音消ゆ 畠山 奈於

陽炎に何かをご覧になった。それは後る姿の人。足音をさせていたが、びたつとその音が消えたという。見知らぬ人ではなく、近しい方なのかも知れないがその後ろ姿そのものが陽炎だったのだろうか。作者の記憶の裡にある方なのだろうか。幻想の一句。

青き踏むベビーカーより降ろされて 浜田 優子

幼子を囲む大人の期待感が見えるようだ。野遊びに出て、ベビーカーから子を降ろし「立とうね」と。靴を履かせたかも知れないし、素足のままで立たせたかも知れぬ。立てば歩めの親心。下五の「降ろされて」に成長を期待されている子の当惑顔が見えるようでもある。

あるがまま生きると決めて海雲食ぶ 原田ミチ子

♪「あるがままの心で生きられぬ弱さ」と歌ったミス・ターチルドレンの『名もなき詩』。そこには「愛、自由、

希望、夢（勇氣） 足元を「ごらんよきつと転がつてるさ」の詞も散見される。掲出句の作者も晩年の自由、希望など求め「あるがままに生きんと決め」たに違いない。それが海藻の「海雲食ぶ」と連結した途端、可笑しみが生まれた。モズクは低カロリーで、その植物繊維には抗血栓作用、抗炎症作用、抗腫瘍作用、免疫調整作用があるというから、「あるがままに」も先ずは体の改善から始めたのであろう。

雛千体ひとりひとりが耐へてをり 春田 千歳

古くから在る雛人形をたくさん陳列披露する町。川幅いっぱいには数百本も吊す鯉幟とは異なり、雛はそれぞれが微妙に表情を変え私たちの眼前に居る。男雛、女雛、憂いた顔の雛が一体ならばさほど感じないだろうが、この句のように千体も見せられたら「ひとりひとりが耐へて」いると感じても可笑しくない。何に耐えているかは各々が読み解けばいい。歴史を生き抜いてきた雛たち。

センターの追ふ白球へ揚雲雀 平野 豊雄

白昼の野球試合。打球がセンターの後ろまで高く伸び、その白球を選手が追っているという景。加えて雲雀も白球を追っているかのように高く揚がつていく。何処の球場だろう。一度出かけてみたい気もする。

銅像の一人が動き万愚節 平野 美子

銅像なりきり大道芸。彫像芸というのだそうだ。欧米で早くに流行り、日本にも数年前上陸。イベントで依頼すると出前で来てくれるらしい。この句では動かないと思っていた銅像たちの一人が動いてしまった。このナンセンスに万愚節（四月馬鹿）の季語を置き、成功した。

啓蟄やエレベーターのどれも上 本多 遊子

四台くらい並んでいるエレベーター。乗ろうとボタンを押すも、どれもすでに上昇してしまっていて暫く待たねばならない。その苛立ちを顔にも出さず、ひたすら降りて来るのを待つ。啓蟄のエレベーターはどれも元気で呼ばれるとすぐに昇ってしまう。AI搭載であれば、作者のために一台は待機しているだろうに……。啓蟄のデパート、高層ビル、病院はくれぐれもご注意。

菜の花や夕月かかる太平洋 松本 余一

〈菜の花や月は東に日は西に 蕪村〉を当然踏まえているだろう。眼前の菜の花の黄と、遠景の太平洋の紺。夕月が仄かに浮かび、綺麗な句に仕上がった。

手のひらはやさしき器ひなあられ 持田きよえ

言われてみれば、手の平は自分の体の中では一番やさ

しい。鉄面皮といわれる顔よりも何十倍も優しい。子等の手の平に乗る雛あられもまた優しい。優しいもの同士で作られた雛祭の一句。手の平が童心で溢れている。

なかぞらの風の手応へ風の糸 森尻 禮子

風揚げの子の手にある風の糸。よき風を得て高く揚がつたその風を保つには、中空の風の手応えを感じないといけない。微妙な手応えを微妙な操作により修正し、もつと高くもつと高く揚げる。

漂ふ水母 吾妻橋より 厩橋 山田 雅子

先日の「閏3周年記念」の懇親会。屋形船に乗るまで隅田公園から吾妻橋をくぐり厩橋まで大川沿いに皆でぶらぶら歩いたのだった。その川面に水母が浮いていたので作者も驚いたことだろう。「漂ふ水母」。思えば私達も漂っていたのだ。吾妻橋も厩橋も地味な名だが、「吾妻」は記紀の世からあるし、「厩」は万葉集にも詠まれている歴史ある名である。固有名詞を巧みに取り入れた一句。

母の日や針ありつたけ糸通す 横須賀智子

母の日は母に感謝する日。作者は家にある針箱から全ての針を取り出し、その針に糸を通す。針供養ではない。その糸を通した針は、母のためのもの。それが作者に

とつての母への感謝のしるし。年を取ると針の穴に糸を通すのも難儀になる。こういう感謝の仕方があったのか。

尖りたるくれなゐの芽に春の雪 和田 郁子

春雪に渗む紅の芽。それだけで何やら美しい景を結ぶが、この句は「尖りたる」の写実がその美しさを倍増している。春の雪と出合い、この新しい芽はこれからもつと伸びていくに違いない。希望の感じられる句だ。

大船観音ぬおつとや春眺めをり 阿部 草薫

電車に乗っていて、その車窓から遠くの大船観音が見えてきたのだ。「ぬおつと」が大船観音の現われ方でありこれを見た作者も「ぬおつと」驚いた。それが何やら春の景色に作者は思えたのだ。ぬおつと春が来たのだ。

早春の降車ボタンは海へ押す 伊澤やすゑ

江ノ電かと最初思ったが、そのような限定された電車の「降車ボタン」ではなさそうだ。早春の海への憧れ。それが全て。作者は何処に身を置こうが降車ボタンを押せる。このファンタジーが素敵。

喪失の歯の深き穴 春嵐 牛込はる子

歯を抜いたあとの穴。それは舌でなぞれば確認できる。

ごつそり抜けたので穴は深い。抜き始めてから抜き終わるまでの決して短くはない時間。終ってみれば、それは春風が吹いたような出来事だった。そう私は理解した。

薔薇の垣めぐりて覚悟齒科医院 内海 範子

この句も歯に関連する。歯医者さんに行くのが怖い。痛い目に遭うのが怖い。行きたくないのだがもう予約は取つてあるし、歯科医院の門のところまで来て、覚悟しつつ薔薇垣をくぐつて中へ入つた作者。もう組板の鯉だ。その後のことは知らない。

剪定にランニングにと人始動 太下 壽櫻

春到来。人もようやく身が軽くなり始動開始。その行動の例として、剪定とランニングをこの句では挙げているが、この二者がまつたく方向の異なる行動。一方は剪定の必要のある枝を剪定し、もう一方は自分の健康のために道をどこまでも走る。二者に接点が無くバラバラなのが何だか可笑しく、そこがこの句の魅力になっている。

アネモネや中村絃子の黒目勝ち 太田 裕子

ピアニストの中村絃子は二〇一六年七月に七十二歳で死去。二〇一三年十月のリサイタルの模様をテレビで聴いたことがある。パッパから現代音楽まで幅広い演奏活

動を続けた方だが、彼女が黒目勝ちだったとは。この句、アネモネが動かない。彼女のその黒目はアネモネの芯の、さりげない黒に似ていたのだろう。

春光や出かけようとの子等の声 小河原政子

元気のいい子どもが家の外にまで聞こえてくる。兎に角、子どもはじつとしていない。天氣が良ければ尚更で「ねえ、行こうよう、行こうよう」と駄々を捏ねて親を督促する。きつとこの家族は出掛けて、明るい表通りを愉しく歩いたことだろう。「春光や」が秀抜。

遠山は竹の秋なり淀流る 小野 直美

淀川の流れ。琵琶湖から流れ出る瀬田川が京都で宇治川となり、大阪に入り淀川の名に変わる。この句の淀川は竹秋を迎えた遠山の趣とうまく調和し、落ち着いた日本の風景として提示されている。「遠山は竹の秋なり」の断定が効果的。全体の韻律も心地良く安定感がある。

三日程同じ前掛け初明り 金子かほる

正月のお節などの準備をしていて前掛けの汚れに気付かなかつたらしい。準備が終り、元朝がいよいよ本番。初明りの見える前に起き、その三日間同じ前掛けを締めていたことに気付いた作者。働き者の家系なのだろう。

満開の花の憂ひや我らまた 金田 知子

桜が咲いたとただ喜んでいただけでなく、満開の桜から何がしの憂いを感じ取り、且つ、その憂いは「我ら」（自身も含む人間社会全体）の憂いでもあるという。「我らまた」の「また」は、作者の嘆息である。

牡丹鉢目覚めの時か赤芽吹く 金田 喜子

牡丹の芽を詠む。赤い芽から目覚めの時という言葉が浮かんだものと思われる。昨年、上野東照宮の牡丹園に寄ったとき、その事務所内にまだ咲いていない寒牡丹がところ狭しと置かれていた。作者の目の前にある牡丹の芽。この先の開花が待たれることでしょう。

焼場より見下ろす街の薄霞 菊地 孝枝

火葬場はたいいてい地方では小高い丘の上に建っている。煙突から昇る煙が見えてきて、そこから亡き人をあらためて思う。待っている間、親族、知人、縁者らとのさりげない話から、知らなかった故人の功德を聞くこともある。収骨後の合掌を終え葬儀場の外に出ると、そこから市街が見え、掲出句ではその街に薄く霞が懸かっている。葬つたあとの遣る瀬なさに程にそれは薄く棚引いている。自身の経験から、この句をそのように解釈した。

囀や歩みすずるにいささ川 北 好夫

いささ川は「細小川」で、水の少し流れる川をいう。その辺りを漫ろ歩きしているときに、囀りが心地良く聞こえてきた。この句をそのまま口にしてみるとその形、調べに無理のないことが解かるだろう。余分なことを盛つていず、句全体が簡潔に納まっている。

天ぶらの食べきれぬほど春が来て 木山 有衣

春が来るのを「天ぶらの食べきれぬほど」と表現した句を初めて見た。この句も先日乗った屋形船での吟詠である。天ぶらの喜びと春の喜びに上下関係はなく、並列に並べられていて、これほど目出度い句はない。

春の潮船の鴨居の低きかな 久保田勝一

この句も屋形船での収穫。花見の時期なのでどうしても船外の景だけに注目しがちのところ、作者は船内の鴨居の低いことに気付いた。この発見でもう勝負は決まったも同然。「鴨居の低きかな」―俳諧味のある句だ。

手に取らば持ち重りして蝌蚪の紐 栗原 季星

子どもたちが手にしているのを見たことがある。作者も持った経験があるようでその「持ち重り」を実感。沢山の命が数珠繋ぎに並んでいるのだからさぞ重いだらう。

こんなにも仏の座あり戦あり 小坏あゆみ

「戦あり」で甘い抒情から決別した。仏の座の「仏」と「戦」の取合せも斬新。戦から戦死く仏の連想に無理がない。「こんなにも」の素朴な表現もいい。

東風少し吹き始めた 瓦職 小泉まり子

「東風少し吹き始めた」は、屋根に上っていた瓦職人の言葉。瓦職人は東風だけでなく一年のおおよその風を全身に浴び仕事をしていよう。危険な仕事でもあるが、春の到来を逸早く感じられる、そういう羨ましい職業。

桜さくら八十五歳はまだ未完 幸喜美恵子

私の一回り上だったのでね。「まだ未完」は実感かも知れないが謙遜と思いたい。まだ余白、糊しろがあるということ。「五十六が蕾なら七十八は花盛り」は沖繩の『十九の春』の替え歌。この「桜さくら」も花盛り。

築山へじやんけんグリコ名草の芽 小濱けえ子

グリコ・チョコレイト・パイナップル。小さな頃元氣いっぱい遊んだ「じやんけんグリコ」だ。グリコのキャラメルは一九二二年（大正十一年）に発売が始まっているので、この遊びはそれ以来のもの。この句、「名草の芽」に子等のこれからの成長が窺え、明るく仕上がった。

卒園歌張り上ぐあんなこんな事 小林ゆきお

まだ子どもが小さい頃に、NHK「みんなのうた」で流れた「思い出のアルバム」という唄を思い出した。♪「いつのことだか／思い出してごらん／あんなことこんなこと あったでしょう…今日からみんなは一年生」。この句の「卒園歌」はこれかも知れない。今でもこの歌を聞くと私は涙ぐむ。あんなことこんなことがあった。

古本の処遇迷へばきららかな 小林 玲

この「きらら」はきらら虫、つまり紙魚のこと。古本を捨てるべきか残しておくべきか、その処遇に迷っている時に「きらら」を見たのだろう。紙魚は糊付けされた紙を好み、舐めるように食害するという。魚ではないが、銀色をしているので英語ではシルバーフィッシュという。詩的に言えば「文字食う虫」。さて、作者はどうした。

春愁ふもやしの髭をとりながら 斉藤久美子

春愁は理由・原因があつて愁うのではない。漠然と物悲しいのである。理由なき愁いであるから、句作するときには理由を言わない。掲出句も理由を述べてはいない。逆に、愁いつつ、もやしの髭を取っている。これが可笑しい。春愁がもやしの髭を取らせているのだ。もやしの髭というのが何だか可笑しい。

梅が香につつまるる丘汀女句碑 島 昌子

中村汀女の句碑は、熊本の汀女の生まれた江津湖畔で見たことが在るだけで、この「梅が香につつまるる丘」の句碑は見えていない。汀女の俳句の道は大野林火の言葉を借りるならば「日常茶飯の中に抒情の憩いを見出す道」であり、清新な心が句作の底辺にある。〈曼珠沙華抱くほどとれど母恋し〉〈とどまればあたりふゆる蜻蛉かな〉〈路の墓おもひおもひの夕汽笛〉〈ゆで玉子むけばかがやく花曇〉〈外にも出よ触るるばかりに春の月〉等々。さて、掲出句の丘に建つ句碑は梅の香りに包まれているという。きつと素晴らしい句碑なのだろう。

草萌や肩組み歌ふ「若者よ」 嶋谷 宗泰

昭和三十年代だろうか、歌声喫茶でよく歌われた「若者よ体を鍛えておけ」の歌。肩を組み合つて歌つたそうである。私の世代で集会の終りに肩を組み歌つたのは「インターナショナル」。この句は「草萌」が若者を象徴して、夢と希望に燃えた時代を彷彿させる。

蘆の角宇宙静かに眠り解き 清水 悠太

地球の生命は宇宙の誕生によつて生まれた。故に宇宙こそ我々の神といふことができる。この句の「蘆の角」も勿論、神の子である。枯蘆から蘆の角へと輪廻する時

それが即ち「宇宙静かに眠り解く」ということになるのだろう。水の惑星の水辺に命が育つていく。

後悔をさらりと捨てて青き踏む 首藤 久枝

そうだ、街を出よう。山崎ハコの「気分を変えて」の唄ではないが「憂鬱な毎日をどうしよう」と思うことは誰にでもあると思う。そんな時は気分を変え、後悔なんかもさらりと捨て、野に出て、青きを踏むこと。風景も空気も日常とは違う。そうだ、街を出よう。

日に六千歩課して花見は川伝ひ 正田 和子

余り無理してはならない。一日一万歩とか八千歩とかの目標設定は、或る年台以上では体に悪い。この句のように六千歩くらいに納めておいた方がよろしいと聞いたことがある。逆に、統計上九千歩が良いという話も。川伝いに花見をするだけでも結構な距離になる。作者もそれは先刻承知。ゆつくり花見見物をしたことでしょう。

献体の友に献杯春深む 新海あぐり

この句の前に〈春宵や酔うて亡き友呼び寄せる〉の句を置いているので、その友人が医学教育のために自らの体を献体したのだろう。献杯しつつ作者はその死を悼み献体の志を思う。いよいよ春も深くなり、酔いも早い。



卒業の別れがたきや町歩く 菅原 淑子

以前の閩誌で五十年前の映画『アメリカン・グラフィティ』を採り上げたことがあった。高校を卒業した若者が、推薦を受け都会の大学に飛び立とうという日の前夜を描いた作品だった。親しんできた町を出ようかどうか迷いながらの一夜の彷徨と出来事。正に、この句の「卒業の別れがたきや」であり「町歩く」のとおりである。名残を惜しみつつ、若者はそれぞれが別の道に進む。複雑な気持ちを整理するための「町歩く」と理解した。作者もまた同じように町を歩んだ経験があるのだろうか。

ゆつたりと隅田川の春や梅若や 杉淵真喜子

『隅田川』は、平安時代中期の梅若丸と狂女となった母親の悲しい物語。人質に攫われた我が子を探し求めてきた母親が隅田川岸で梅若丸の死を知らされるといふ梅若伝説が基となっている。作者は麗らかな一日、屋形船で隅田川を下っているときにこの梅若丸を想い出した。「春や」で春を満喫した心を、「梅若や」で、梅若丸とその死に狂った母親の気持ちを表現。(「羽子板や子はまぼろしの隅田川 水原秋櫻子」)。梅若忌は四月十五日。

川舟の棹さすしづく風光る 鈴木 智子

「未来図」時代、岩手の皆さんのご好意により狛鼻溪

の砂鉄川で舟下りを一緒に楽しんだことがあった。船頭さんが「げいび追分」「南部牛追唄」をしみじみ歌ってくれ、それが川面に響き心地良い時間を過したものだ。その時の一本の長い棹をこの句から想った。作者は雫の光までもよく見て句作されている。風光明媚なこの季節ならではの佳句。

懸命や里神楽継ぐ児に教へ 鈴木 藤子

土地の芸能を次の若い世代に引き継ぐ。これは現代ではとても難しく、この句では子どもたちへの引継ぎを「懸命や」と詠む。里神楽ではないが、東京の佃祭の御囃子連でも若い世代への伝承が行われている。太鼓の撥捌きでは女師匠が何回も模範を示した上で、「てな感じ」と言って終る。あとは自分で工夫しろということ。岩手の子どもも一生懸命に励んでいることでしょう。

春の泥犬洗ふ吾の獣めく 高橋 章子

泥まみれの愛犬を一生懸命洗っているうちに、洗っている本人も獣のような息遣いになったのか、獣の心になつていったのか。自分をこのように詠むというのは珍しいことだ。春の天気の良い日だったと思われるから、水を使うのも苦にならず、気持ちよく洗えたのは春の泥が明るい。

クラス会元気で勝手傘寿春 高橋満利子

「元気で勝手」に拍手喝采。勝手は自分勝手。勝手だから元気でいられるのだろう。それでもどなたかが纏め役で居て、愉しいクラス会だったのでないでしょうか。傘寿の春とはまことに目出度い。

早春の車窓の光多摩河原 高橋美智子

多摩川は氾濫したこともあるが、今は水量も減った。それでも、早春には川周辺の草木の芽立ちが眩しいくらい目に飛び込んでくる。その光を作者もまた車窓から感受している。その光の詳細は言わず、ただ「早春の車窓の光」と述べただけで後は読者に委ね、早春の多摩河原を想像させている。潔い作り方と思う。

「閨丸」舳先に水脈に風光る 竹森 美喜

先日の「閨3周年記念」の屋形船を「閨丸」と名付けてくれた目出度い句。今はもう昔だが、鍵和田柚子先生と三重にご一緒させて頂いた時に三重支部の方々（出口一点さん、廣波青さんなど）が大歓待してくださり、宴では大きな大漁船のような舟盛りに、当地で獲れたお刺身が一杯。舟に「鍵和田丸」と書いた幟も立ててくれて大感激した記憶がある。故に、この閨丸にも感激。「舳先に水脈に風光る」という篤い祝詞を戴いた。精進したい。

梅一輪玉ねぎ微塵の香に勝る 田中 京

花同士ではなく、梅の花の香りと玉葱の微塵切りの香りを比較してそれを詠んだところがユニーク。しかも微塵切りより梅の香の方が匂うというのだから、梅も大喜び。玉葱の微塵切りに負けなくてよかった。作者は、このようなのほほんとした作りをさりげなく披露する。

春の潮かもめに遊記きつと在る 寺田 幸子

この句もきつと屋形船に乗ったときに得たモチーフから作られたのだと思う。「遊記」は「西遊記」の遊記である。かもめが各地を飛んだその手記。「きつと在る」という強い断定は、作者の句作の特徴の一つ。在ってもりたいという希望の言葉である。鷗はいろいろの港町を飛び、住宅の窓の外から人間の愛憎劇をたくさん見ているという。いや、これは寺山修司の歌詞から借りた鷗のイメージ。愛憎劇を見て鷗は笑うだけである。遊記はその笑いの中にあるのかも知れない。